

映画と女性監督

映画産業が盛んになっても、長らく女性監督の活躍を見ることはありませんでした。1930年代の世界の映画黄金時代は男性監督が築き上げたものでした。映画監督は巨大な資金と現場をまとめる力があるため、女性には難しいと思われていました。

しかし、1976年からの<国連婦人の10年>の最終年にあたる1985年には、世界中の女性たちがあらゆる分野で活発な活動を行い、映像の世界でも女性監督が続々と出現し、女性自らの手で、かくありたい女性像と、かくあって欲しい男性像を描きはじめました。それは、これまでの映画史にはなかった新鮮な女性の視点であり、衰退のきざしに見える世界の映画業界に大きな刺激を与えるものでした。

また、1985年は日本でも東京国際映画祭がスタートし、その1部門として、<映像が女性で輝くとき>というタイトルで「国際女性映画週間」が開催されました。しかし、この時点で日本には女性の長編劇映画の職業監督はいませんでした。

現在では、アメリカのサンディエゴ州立大学のテレビ・映画における女性研究を行う機関が発表した調査結果で、2020年興行収入が高かった映画のうち、女性が監督を務めた作品の割合は16%で過去最高だったことがわかりました。

欧米をはじめとする世界の映画産業では、男女平等を目指し、映画製作における様々な分野で、男女の割合をフィフティフィフティにすることを目指した取り組みもされており、これまでは圧倒的に男性中心だった映画産業に風穴を開けようとしています。^{注1}



日本での女性監督の活躍

アカデミー賞

映画作家 河瀬直美

日本では、河瀬直美監督が劇場映画デビュー作「萌の朱雀」(1997年)で、カンヌ国際映画祭カメラドール(新人監督賞)を史上最年少(27歳)で受賞。「殞の森」(2007年)で、審査員特別大賞グランプリを受賞しました。

2018年、2020年東京オリンピック公式記録映画の指揮(監督)に決定し、注目されています。

日本の女性監督たち(抜粋)

田中絹代 女優であり、女性映画監督のパイオニアです。「恋文」をはじめ、生涯で6作品を製作しました。

西川美和 代表作に「蛇イチゴ」「ディア・ドクター」などがあり、小説家としても高い評価を受けています。

萩上直子 「かもめ食堂」が大ヒットし、「めがね」「彼らが本気で編むときは、」などの代表作があります。

蜷川美花 写真家として数々の賞を受賞しており、映画代表作は「さくらん」「ヘルタースケルター」などです。

安藤桃子 代表作は「カラケ」「0.5ミリ」などです。(モモ子)

アメリカの「映画芸術科学アカデミー」によって授与されるアカデミー賞は、最も優秀な作品、俳優、監督などに対して、オスカーと呼ばれる男子の立像を与えるところから、オスカー賞とも呼ばれています。

1929年に第1回を開催して以来、今日まで続いており、映画の世界におけるもっとも存在感のある賞で、毎年全世界に放送されるセレモニーは注目されるイベントの一つとなっています。

2016年、アカデミー賞俳優部門にノミネートされた20人全てが2年連続で白人であったため^{注2}、「白人偏重」だとの批判が出ました。映画芸術科学アカデミーは、会員の多くを白人男性が占める状況を変えるため、選考メンバーの構成について2020年までに、女性や白人以外を現状の2倍にすると発表しました。

^{注3}その後、毎年、新規会員を増やした結果、2019年には会員が9000人弱になり、女性や白人以外が大きく増えたとされています。そして2020年、韓国映画「パラサイト 半地下の家族」が作品賞など4部門を受賞しました。^{注4}このことは、映画芸術科学アカデミーが新規会員を増やし多様性を進めてきたことに関係があるのかもしれませんが。

プリンセスの移り変わり

「白雪姫」「シンデレラ」
「眠れる森の美女」

1937年~1960年代のプリンセスは「女の子は美しく従順であれば、地位と金のある男性に愛されて結婚して幸せになれる。」というような描かれ方をしていました。当時の社会では、男性が稼ぎ女性は家を守るという役割を担うという考え方が一般的であったからかもしれません。

「リトル・マーメイド」
「美女と野獣」「アラジン」

1989年~1990年代のプリンセスは、行動的で好奇心が旺盛、自立もしていましたが、依然として恋愛と結婚が物語の中心でした。



「アナと雪の女王」

2000年以降のプリンセスでは、家族愛をメインテーマにしており、姉妹がつらい過去を乗り越え、それぞれの特性を受け入れ、ありのままの自分を受け入れています。また、「プリンセスとの結婚」を最終目的にしていた古典的なプリンセス像とは違い、主体的な姿に変化しています。

スクリーンから広がる世界

映画は男性中心のハリウッドで栄え、優秀な作品を選ぶのも男性中心で行われてきました。女性が活躍するまでには長らく時間がかかりましたが、近年ようやく女性の監督が増え、スタッフや関係者も増え、女性ならではの視点で描かれた作品や女性が共感できる場面が増えてきました。そしてディズニー映画のプリンセスは、社会と共に少しずつ変わり、「女らしさ」よりも「自分らしさ」を選び、主体的に生きる姿を見せています。

また映画は、社会を反映しつつ、社会の少し先の求めるものを描いています。今後は、ジェンダー平等や多様性のある作品が多くつくられることを願っています。

最後に 映画は私たちにたくさんの感動を与えてくれます。国境と時間を超えて、普段あまり知ることができない異文化や多様性を知る楽しさに触れ、これからも、いろいろなことを考えながら映画を楽しんでみませんか。最後に、スタッフのお気に入り映画を紹介します。



「風と共に去りぬ」1940年
.....
1940年アカデミー賞を受賞し、誰もが知っている作品。何度となく見たこの作品は、女性の強さをとても感じ、明日への希望が持てます。

「ココ・シャネル」2008年
「ココ・アヴァンシャネル」2009年
.....
「ココ・シャネル」は、シャリー・マクレーンが主演を「ココ・アヴァンシャネル」は、オドレイ・トウが主演をつとめ、ココ・シャネルの半生を描いた作品です。2つ合わせて観ると、より楽しめます。

「ジュリー&ジュリア」2009年
.....
1960年代、フランス料理を習ったジュリアは誰にでも簡単に作れるように料理本を出版する。50年後、その本に出合ったジュリーが試行錯誤しながらも目標に向かっていく姿は、ついつい応援したくなります。

「ローマの休日」1953年
.....
1953年、オードリー・ヘップバーンが初主演でアカデミー賞主演女優賞を獲得しました。70年近く経った今も尚、私たちを魅了します。

「天才作家の妻 40年目の真実」
2017年
.....
夫がノーベル文学賞受賞を受賞する当日、これまで40年間支え続けてきた妻の秘密が明かされます。妻は、自分の人生を取り戻すための行動を取るのか。見終わった後深く考えさせられます。

参考文献：高野悦子(1992)「私のシネマ宣言」『朝日新聞社』/萩上チキ(2014)「ディズニープリンセスと幸せの法則」『星海社』

注釈：1<https://front-row.jp/_ct/17422489>(2021年8月14日閲覧)2<「白人ばかりのアカデミー賞」と批判を受け、アカデミーが大胆な改革案発表：映画ニュース - 映画.com (eiga.com)>(2021年8月12日閲覧)3<<https://www.asahi.com/articles/ASJIR34MWJIRUHB100Q.html>>(2021年8月12日閲覧)4<国際化するアカデミー賞と韓国映画の台頭：日本経済新聞 (nikkei.com)>(2021年8月12日閲覧)